



「仲良し」に歴史あり

柴坂寿子

1 「仲良し」で意味されるもの

幼稚園・保育園の生活で、「仲良し」はさまざま
な意味合いで使われていると思う。子どもたちの楽
しそうなやりとりを見て「仲がいいねえ」とほほ笑
ましく思ったりもする。またある子どもに毎日一緒
に遊ぶ相手が出来た時、「仲良しが出来てよかった
ねえ」と喜んだりもする。前者はその場でのやりと
りの質を指している、後者は子ども同士の長期的な
関係を指しているといえるだろう。ここでは後者の
意味での「仲良し」を取り上げてみたい。つまり、
クラスのように毎日顔を合わせて暮らしている子ど
も集団の中で、特定の子どもたちが結び付き、その

結び付きがある程度の期間安定して続いているとい
う意味での「仲良し」について考えてみたい。次に
挙げる3つの事例はどれも二年保育のクラスで、ク
ラス替えはなかった。名前はすべて仮名である。

2 クラスの中の「仲良し」

●一対一の「仲良し」から複数の中の「仲良し」へ
えりは入園後しばらくして「しおりちゃんがかわ
いくて好き。お友達になりたい」と保育者に話して
いた。保育者が登園してきたしおりに「えりちゃん
が待ってたんだよ」と言って遊ぶ機会を作ってから、
二人でよく遊ぶようになった。しかし、しおりはえ
りと楽しく遊んでいても、他で面白そうなことが起
こるとそれに惹かれてぱっと抜けてしまうことがあ
った。えりはしおりの手を取って連れ戻していたが、
しおりはこうしたえりの努力を嫌がって文句を言う
こともあった。二人の「仲良し」はいつまで続くの
かなと危ぶまれた。この後二人は次第にゆりを中心
とした数人の遊びに加わるようになる。ゆりたちの

遊びでは、ゆりが先生で他の子は生徒、ゆりがお母さんで他の子は子どもと、ゆりが他の子を仕切って進み、えり・しおりの直接のかかわりは目立たなくなつた。結局二人の「仲良し」はゆりたちの中に埋もれながらも、しおりが一年目の終わりに転園するまで続いていった。

●長年の「仲良し」の解消と復活

入園一年目からいつべいはひできと二人で遊ぶことが多かった。ひできが遊びをリードして、時に強い言葉で指示を出した。いつべいはひできにちよつと気を遣いながら指示に従っている様子だった。それは二年目になつても変わることはなく、卒園までずっと続くのかしらと思われた。しかし年長の五月ごろから突然いつべいはひできと離れて遊ぶようになり、「仲良し」は終わりを告げたように見えた。このころ、いつべいはよく大型積み木で大きなお城を作っていた。そこにひできが他の子を引き連れてちよつかいを出しに来る。いつべいはいらつきながらも黙々と自分のお城を作り続けていた。この時期

を経て七月には、いつべいはまたひできと遊ぶようになり、「仲良し」は復活した。ただし二人ではなく、ひできを中心に複数の子どもたちで遊ぶようになった。ひできが指示を出すのは相変わらずだったが、強い言い方は少なくなつた。いつべいは何かふつ切れたようで、以前のように気を遣うこともなく、適当に抜けて他の遊びに顔を出してまた戻ってきたりと、緩やかな「仲良し」になつた様子だった。

●かつての「仲良し」

ここはクラスの中では背が低く、男女で分かれて遊ぶ時は同じく背の低いごろつといつもペアだった。このことがきっかけで一年目からごろつと「仲良し」になる。二年目になつてごろつがてるたち男の子数人と毎日のように戦いごっこなどで遊ぶようになった。ここはアイドルのような存在としてごろつたちの遊びに加わり、戦いの基地で料理を作ったりしていた。しばらくして男の子たちのちよつと乱暴な振る舞いが嫌になつたのか、ここはごろつたちから離れ、ゆりあたちと遊ぶようになり、それまでのこ

ろつとの「仲良し」は解消したようだった。しかしその後もごろつとの間にはちよつとしたやりとりが時々あり、体調がよくない時などには、ごろつにじゃれに行つて安心する様子も見られた。このように解消したかつての「仲良し」も、ところには大きな存在であり続けたようだった。

3 「仲良し」に歴史あり

幼稚園・保育園の生活の中で、ある時点では安定して見える「仲良し」には、過去のいきさつも未来の変化もある。子どもたちはいいなと思う子と「仲良し」になろうとしたり、壊れやすいかもしれないその関係を何とか維持しようとしていたり、時には解消したりすることもある。その過程は多様だし、思いがけない動き方もある。えりたちのように危うかった「仲良し」が複数の子どもたちの中で落ち着くこともある。いつべいたちのようにいったん解消してこそ結局は長く続いたと思われることもある。ところたちのように、ある時期「仲良し」だったことは子

どもに意味をもち続けるのだなあと思わせる事例もある。そしてこうした「仲良し」の過去のいきさつやら未来の変化やらは、幼稚園・保育園が子どもたちが年単位の長さで毎日の生活を積み重ねる場だからこそ起こる、大事な体験なのだと思う。

幼稚園・保育園の生活の中で、幼児期の子どもたちの中に、「仲良し」の歴史があること。このことは幼稚園・保育園の保育者の方々にはあたりまえのことだろうと思う。話し合いの場や休憩の場などで、今の時点の子どもの「仲良し」の状態が話題になる時、背景として過去のいきさつを挙げたり、今後どうなりそうかなど予測したりされていると思う。しかし園の外にいる人には、幼児期の子どもたちに「仲良し」の歴史があることはあまり想像されていないように思う。それは、保育者の方々があたりまえにされているように、入園から卒園までの時の流れを子どもたちと共にする中で初めて実感される姿なのではないだろうか。

(お茶の水女子大学大学院)